明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種郵便物認可
明治三十五年九月十五日發行　毎月二回一日十五日發行

政教時報

第八十七號

論說
實驗の宗教　〔社說〕
▲實驗は生ける事實なり
▲歐洲最近の思潮
▲宗教に對する思考
▲佛教の精髓
▲實驗後の實行
心靈上の個人衛生と公衆衛生　朝永三十郎
社會
◎汝の義務を行へ◎學生監督會の設立
◎矢野龍溪の『新社會』◎宗教界の近事
◎加特力の乞食主義◎伊太利の犯罪調査等〔海外時事〕
雜錄
監獄未來の夢物語　筑波閑人
▲閑文字▼
視察
無料宿泊所　池山榮吉
講演
讀『學談雜錄』　眞岡湛海
▲報道一束▼
信界
佛弟子小傳　近角常觀
▲新刊紹介▼
井ルヒョー博士の肖像

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。

二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合により國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。

三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。

四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。

五、公認教制度を調査する事。

六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。

七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。

八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。

九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。

十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。

十一、殖民傳道を奬勵する事

十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講する事。

政教時報

實驗の宗教

▲實驗は生ける事實也

吾人が宗教の眞髓として主張せんと欲するは哲學の宗教でもなく、教權の宗教でもない、言はゞ實驗の宗教とでも云ふべきものである。實驗と云ふは吾人の心中に於て親しく實驗したる事實である、或は苦しみ、或は憂へ千變萬化極りなき吾人の胸中に於て、たしかに實驗したる生きたる信仰である。

實驗と云ふ言葉は頗る誤解に陷り安き弊がある、一寸聞くときは理化學上の實驗の如く、又ベーコン己後發達せる經驗學派の經驗の如く考へらるゝ虞もあるが決してそうではない、何んとなれは宗教は科學の範圍を超絶するものなれば、此の如き科學的實驗が宗教上に適用さるべき筈がない。去りとてコントの主張する如き、社會の實益を最終の目的とするものでなく、セエリングの說の如き、神秘的事實の實驗を唱ふるのでもない、唯吾人の心中に於て感じたる生ける事實である。即ち佛陀の慈悲を適切に自己の胸中に感じ、直接に其靈光に接觸することである。蓋し、實驗と云ふことは實驗したものでなければ分からぬ、生きたる人世界に於て、諸の惡しき心、諸の穢しき念を經驗して一點の光明なく、一寸の餘裕なきに至り、苦悶煩惱の後、始めて佛陀の慈悲を生き〳〵と感じ、直接佛の心と融化する事實である。故に決して特に新らしきことを云ふのでなけれども、宗教として生ける部分が不明である故に特に明白に言ふまでのことである。

▲歐洲最近の思想

歐洲現時の思想界の傾向は人生なる考を、宗教に限らずすべての學問の上に加へて研究することである。而して此新らしき傾向は恰も實驗的の生ける宗教と云ふことゝ符合することゝなる、歐洲過去五十年前までは何事によらず、純理一方より說明することを主とし、形已上學の根抵より築き上ける風であつたが、近頃は社會的心理的の考を以て研究することゝなつた、啻に學問上に於てのみ然るのみならず、詩歌にせよ、音樂にせよ、美術にせよ、若くは社會的事業、文明の評論に至るまで、皆人生なる根本思想より割り出して來ることゝなつてきた。

此傾向を詳しく說明すれば中々一篇の論文の盡すべきではない、而して其中には極端なるものもあれば、溫和なるものもあり、健全なるものもあれば病的のものもあるが何れも人生と云ふ考が主眼となつて居る、政治上に於ては社會主義の如き哀々たる貧民生活問題より割り出したるものもあれば、

獨の中央黨の如き炎々たる舊教の信仰より實現したるものもある。ショッペンハウエルの厭世主義の如きも、哲學として純理的の方面よりも人生の上に一種の色を以て眺めて居る所に興味が存して居る。ニッチエにしても自己が極濃かなる感情と暖かなる天性を以て、現時歐州の文明のあまりに強食弱肉的なると道德及宗教の形式的なるに稍奮激して起り、先づ自己の周圍に向て實行を試みて遂に精神病に陷りたるが如き生きたる思想が價値のある點である。トルストイが世界中の最も壓制極る露國政治に反抗して、愛の福音を宣傳して、貧民の爲めに、奴隷の爲めに、救濟の方策を講ずるのは、たしかに人の心を動かすものがある、ハウプトマン等の作は社會的の方面を描き人情の至微を穿ちて人生の急所を衝き、セセチオンの畫風は事物の特徴を擴大にし、濃厚なる色彩を用ゐて觀者の耳目を刺戟するものである。其美を極むるやワグチルの音樂の如きがあり、其放縱を極むるや、ゴルキイの如きがある、一々之を撿し來るに、其美と醜と、健全たると不健全たるとは偖置き、何れにして生ける人間の胸中より迸り出でゝ人情の心琴に觸れ、鏘々として吾人の心を動かすに至りては何れも共通なる一種の傾向である。

▲宗教に對する思考

人生なる考を根本として考ふる歐州現時の社會にて亦宗教に對する思考も同一の傾向をとりつゝあるは決して怪しむべき譯はない、抑々シユライエルマツヘル已後初めて感情と云ふ考を加へて宗教を考ふる樣になり、理論一方でなくして、生きた考が加はりて來たものである、殊に最近に至りては前記の總ての方面に於ける人生なる思想は宗教の考の上に著しく顯はれて來た、何んとなれば宗教は人生中に於て中心問題とも稱すべき位置を占めて居るからである。

例せばトルストイが福音を解釋するに當りて神は愛であるといふ考が主となりて居る、即ち神を解釋するに哲學的基礎やら歴史的傳說などを捨てゝ、精神的情操たる愛なる思想を以て根本義とする考である。又ハルナックが基督教を解釋するに福音の要義とする點は神と人との間に於ける關係は、天父と子であると云ふ考と其間を結びつける愛の福音である、而して其他天國の思想、メシアスと云ふ考等何れも畢竟猶太的、歴史的遺物に過ぎないことである、ハルナックと云ふ人はベルリン大學に於て教授をして居る人で、新教神學者として有名なる人物である、氏は教條史 Dogmen Geschichte の大家にして同氏の著書たる教條史三冊は恐くは永久の書籍であろう、氏は自由主義で研究をするもの故、教會の方よりは批難があるが、氏の說は歐州到る處に是非の論議の中心となつて居る、彼の『基督教の眞髓』と稱する著書の如きは一たび世上にあらはるゝや中々やかましき事であつた、氏は教會の側よりは異論があつたに拘らず、ビスマークか內閣の側より

無理に大學に入れたと云ふ次第である、氏は殊に原始教會史は最も得意とする所である。此の如く歴史に精通したる人が、其歴史中に於て宗教としての要義となるべき部分と附屬物と見做すべき部分とを分ちた後に眞髓として絞り上げた結果が愛の福音に結飯するので、つまり上來述べ來りたる人生の考を中心として宗教の上に著しくあらはし來りたのである、即ち結局人生の救濟と云ふことが宗教の要義となる、此の如く基督教としては思ひ切りて最も新らしき說を立てた所で漸く佛教の上に於ける眞宗の信仰より眺めて見れば左程珍らしくもないことを述へて居ることゝなる、極端に云へは有神論と靈魂實在の考だけが存在して居る丈がまだ宗教としての極意に達して居らぬらしい。

▲佛教の精髓

謹て佛教を見るに、佛教は釋尊及佛弟子を初めとして後代の信徒に至るまで根本的に人生の問題の解釋より起りたるものにして、宗教としては正さに其極致に達して居る。即人生の大問題とは單に理論でなく、實際の苦痛煩悶に陷りて、遂に之を解脫したる實驗的の宗教である、而して其平和なる結果を涅槃と稱したるものである、是が佛教としての精髓である。而して佛教には時代に隨て諸種の哲學が加はりて居るが、此は宇宙本體論が色々と變りたるまでのことで宗教としての要義ではない。全体佛教者が此哲學的論議の淺深によりて價値か上下するかの如く考へて、甚しきは宗教としての要義本領たる解脫涅槃と宇宙の本體たる眞如法性と同一であるかの如く考ふるまでに至つた。此點に就きては古來幾多の宗教學者かつまらぬ戲論に多くの腦漿を絞り、又現時の學者や青年はつまらぬ心配をして居る樣に考へる、吾人は他日編を改めて、哲學と佛教との關係に就て述へんと欲するが要するに佛教か今日の如く理屈一方に陷りて乾燥無味に陷りたは、確かに哲學の空論に沈みて宗教の要義たる人生の救濟、苦患の解脫と云ふ點を忘却したる罪に歸せざるを得ない。

佛教に於て宗旨の關關と云ふことを、從來は只哲學的議論が一層高くなり、一歩進みたることゝ考へて居つたらしい。是は大なる誤謬である、唯從來の教理なるものが何時の間にやら實驗の新らしき水が流るゝことなくして、版を捺した樣な、形式的の型のみになつて、死し了りた時、大なる宗教的人物が出でゝ、根本的實驗的に人生根本の問題に觸れて、大に苦しみ、大に悶へ、大に安心した生き事實を明らさまに說きたが即ち宗旨の出來たもとである。

鎌倉時代に於ける各宗の祖師の行動をみるに、皆何れも生きたる經驗を以て起つて居る、殊に親鸞聖人は佛教中に於ける哲學的論議の部分を斷然擲ち去りて、人生救濟の根本義を攫みて立たれたものである、即ち佛教としての最終は解脫涅槃であるが、既に解脫涅槃の極に達したる客體は正さに佛陀

であつて、吾人は其人格の感化によりて救濟せらるゝのである、而して其人格の働は暖かなる洪大の慈悲であつて、此慈悲の爲めに吾人は感化せられ救濟せらるゝのである、而して全身感謝の念を以て滿たされつゝ、此佛陀の慈悲を人類全體の上に社會各部に向て傳へることに熱中することゝなる、是實に佛教の精髓にして又宗教としての要義は恐くは此上に出づることはない

▲實驗後の實行

實驗は內心の事實であるが、此內心の事實は決して沈靜的に人を眠らしむるものでなく、必ずや活動的に實行上に結果を持來すべきものである。言を換へて之を言はゞ內心に於ける事實即ち苦痛を解脫するとは社會の方面にあらはれて、社會救濟の事業となるのである、此に於て人生の萬事に初めて意味を生じ來ることゝなるのである。併し信仰の實驗なるものは、一度實驗すれば再びせぬと云ふ譯ではない、寧ろ、每々反覆して經驗するのである、經驗する度每に新らしき光りを蒙るのである、光りを蒙る度每に一歩つゝ實行するのである。

一たび生きたる信仰の實驗を經るときは、吾人は慚愧の念を以て自ら道德の實行を奬勵せられ、同情の心を以て社會の救濟に走り、燃ゆるが如き熱心を以て傳道に靈瘁せしめらるゝ次第である、此に於て佛陀の生ける事實が、吾人の心中に於ける生ける救濟の經驗となり、社會に向て生ける感謝的實行となるものである。

心靈上の個人衛生と公衆衛生

朝永三十郎

肉体上の衛生の術を講ずるものは醫術で、心靈上の衛生を司どるものは宗教（と教育）とである。

衛生に二種の區別がある。一つは、個人々々が、一通り、生理、病理の心得があつて、食物の用心をするとか、清潔を貴ぶとか、運動を怠らぬとか、或は自分の特別の体質に應じて夫れ々々特別の攝生の法を用ふるとかいふ樣に、個人が銘〻自分々々の攝生を心懸けて行くので、即ち、所謂個人衛生である。もう一つは、國家の制度法律の上より、或は郡市町村といふ樣な團体の規約などよりして衛生の術を講ずるのであつて、即ち、衛生組合を設くるとか、傳染病の豫防法として檢疫を施行するとか、交通遮斷をするとか、健康診斷をやるとか、公けの命令で大掃除や溝渫をやらせるとか、警官の手を借りて飲食店の飲食物を檢査するとかいふ方で、即ち、所謂公衆衛生である。

それならば、此個人衛生と公衆衛生との關係はどういふものであるか。兩者は全く無關係で、兩者中の一方は他の一方を離れて獨行することの出來るものであるか、公衆衛生を離れて個人衛生が出來、個人衛生を離れて公衆衛生が出來るものであるか。決してそうでない。兩者は所謂有機的（体制的）關係を有して居るものである。たとへば、有機体といふものは、相對的獨立の生体たる無數の細胞の統一されたる集合であつて、而して此無數の細胞と有機体との關係はどうであるかといへば、個々の細胞が不健全であれば有機体も亦不健全、有機体全体が不健全であれば個々の細胞も亦健全であることは出來ぬ。言換ふれば、全体たる有機体の健全を離れし部分たる細胞の健全なく、部分たる細胞の健全を離れて全体たる有機体の健全は無いのである。個人衛生と公衆衛生との關係も亦是れと同樣である。個人衛生を離れて公衆衛生は成立たず、公衆衛生を離れて個人衛生は成立たぬ。如何程、檢疫や、飲食店の取締りや、大道の溝渫を八ケ間敷したところで、若し、個人が銘〻の家で、腐敗した肉類や未熟の菓物などを平氣で貪る樣では何にもならぬ。又、如何程個人で用心に用心を重ねたところで、公衆衛生が行屆かず、大道の下水には病毒が湧き、隣家に虎列刺患者があつても消毒を行ふでもなく、交通遮斷をやるでもなく、其家族が平氣な顏で當方の家に出入するといふ樣な有樣では所詮駄目である。

心靈上の衛生を司どる宗教も亦是れと同樣で、其仕事は公衆衛生と、個人衛生との二つに別つことが出來、而かも此兩者は決して離すことの出來ぬものである、有機的關係を有するものである。宗教上に於ける公衆衛生とは何であるか。即ち、宗教上の組織とか、制度上とか、感化事業とか、繕風事業とか、慈善事業とかいふ樣な、重もに宗教といふものが社會上に活動する方面である。宗教上に於ける個人衛生とは何であるかと言へば、個人銘〻の精神の修養、信念の確立といふ樣な事であつて、即ち、宗教といふものが社會上の活動に表はれずして、個人の胸中に潛んで居る方面である。若し現今流行の語を借りて言つたならば、前者は宗教の動的の面であつて、後者は其靜的の面であると言つてよからう。

宗教上の仕事を上の樣に二つの方面に別つて置いて、偖て、今日の宗教界を見て見るに、大凡二種の極端なる派に別れて居る樣に思はるゝ。それは、(一)、公衆衛生即ち動的の方面を偏重するものと、(二)、個人衛生即ち靜的の方面を偏重するものである。モー少し極端に言へば、啻に一方を偏重するといふ位に留まらずして、公衆衛生を以て唯一の宗教的の仕事であると心得、動的方面即ち社會的事業の外に宗教上の務めはないと思ふものと、個人衛生を以て唯一の宗教的の仕事であると心得、靜的の方面の外に宗教的の務めはないと思ふものと、二つの勞力ある派別けが出來ると思ふ。が是れは共に中道を逸したものではある。

靜的の方面のみを見て動的の方面を無視する方は、自分さへ養生をして居れば、大道の下水には病毒が湧いて居らうが、隣家に虎列刺患者があらふが、少しもかまふことはないと言つて威張つて居るものである。尤も、自分獨立の覺悟さへ堅固であれば、社會がドウあらふが、隣家の者がドウならふが、夫れに左右さるゝ樣な己れではないといふ樣なことは、或程度までは出來得べきことであり、又人の性格によつては充分出來得べきことであるには相違ない。又かういふ風の氣性は充分奬勵せねばならぬことであつて、吾々は、銘々の務めとしては、出來るだけかういふ樣な覺悟を養ふ樣にせねばならぬには相違ないのである。併し、これが、如何なる場合にも、如何なる性格の人にも、適用出來るとは言はれぬ。銘々にさういふ風に勵んで行くのは善いが、凡ての他人に之を強ふるといふことはどうであらふか。かういふ樣な事が完全に出來るといふ場合、完全に出來るといふ人は、極めて僅少の除外例と言はねばならぬ。大多數の場合、大多數の個人に於ては、先づ〳〵、精神上に於ても肉体上に於けると等しく傳染を免れぬものであると言つて宜しい。多數の個人は社會や公衆の勢で左右さるゝと言つて差支ない。言ひ換ふれば、精神上に於ても、肉体上に於けると等しく、個人衛生は公衆衛生を俟つて初めて充分に行はるゝと言はなければならぬ。

モー少し具体的に言へば、多數の人が宗教の靜的の方面、即ち、精神の修養、信念の確立を維持せんがために、教育事業とか、感化事業とか、矯風事業とか、宗教團体の組織等と言ふ樣な動的の方面に依らなければならぬのである。自分獨りの覺悟さへ堅固であれば、社會かドウであらふか、隣人がドウならふが、夫れに動さるべきものではないといふ樣なことは、快は即ち快てはあるけれども、決して社會全般に適用さるべきことではない。宗教上に於ける一個の貴重で有効なる教訓ではあるけれども、決して唯一の貴重にして有効なる教訓とは言へない。

次に、宗教の動的の方面を見て靜的の方面を無視する方はドウであるかといへば、所詮、下水浚や、撿疫や、交通遮斷の樣な事さへあれば、銘々の家では、腐敗した肉や未熟の菓物を食つても差支ないといふ樣な心得違ひをして居るものである。個々銘々の信念の如何修養の如何を顧みずして、社會上の事のみに狂奔するのは、自分は虎列刺病や赤痢病に冒され、疲勞衰弱を極め、悶え苦しみながら、下水浚や撿疫に奔走するといふ狂態を演じて居るものである。胸中に潜んで居る靜的の信念は、宗教上一切の動的の事業の源泉でなければならぬ。此源泉にして沾れて居れば、其活動は忽ち宗教上の意味を失ふものである。宗教的活動に特有なる生命と堅實性とを失ふものである。

吾々は嘗て日光に遊んで、華嚴の瀧を觀た。その、千仞の

絶壁に白布を懸けつらねた樣な立派な景色を觀、豁然たる襟乾坤を振蕩せんばかりの勢を見て、いたく其壯觀に打たれたのである。夫れより又上つて中禪寺湖の景に接し、其景色が如何にも溯々として、幽閑で、平靜であるのを見て、誠に是れある哉といふ感じを起したことであつた。是れ丈け平靜で、豐富なる蘊蓄が面にあればこそ、夫れが溢れ溢れて彼れが如き壯絶快絶の活動が出來るのである、宗教的人物は實に斯の如くでなければならぬ、宗教的活動は實に華嚴の瀧の樣でなければならぬのである。といふ感じを起したのである吾々は又宇治川を見ても同樣の感を起すのである。瀨多より宇治に出る間、急流激湍、白浪を揚げ、岩を碎き、岸を裂くといふ勢は何處から來るかといへば、其奥に琵琶湖といふ豐富なる源泉を控へて居るからである。

京都に行つて鴨河を見、神戸に行つて湊川を見た人は承知の筈である。鴨川や湊川は、名は川とは言ふものゝ、其實水の無い河原である。偶然には降雨のために非常の水勢を示し、激怒憤越、岩を破り、橋梁を流し、人家を浸すといふことがないてはない。が、併し、夫れも唯の一時のことであつて、二三日も經てば、又原の干涸びた河原になつてしまふ。是れは即ち、中禪寺の樣な、琵琶湖の樣な源泉を控へて居らぬからである。確實なる信念に基かぬ宗教活動も亦之と同樣ではあるまいか。活動の根本たる源泉が涸れて居るから、偶々一時の勢に驅られて、岸を破り、橋梁を流すといふ樣な花々しい活動が出來ぬではないが、夫れはホンの一時の事であつて、鴨川や湊川の出水と同樣、決して堅實、耐久、生命あり、精彩ある活動であることは出來ぬ。凡て、活動が堅實で、耐久で、生命があり、精彩があるといふことは、宗教的活動の特有の點であるのに、現今の宗教的活動が大に此點を欠いで居るのは、畢竟其本を忘れて末にのみ走つて居るからではあるまいか。

靜かなる湖水も、多量の水が蓄積さるれば、其餘勢は何時かは溢れて、山があれば山を穿ち、岩があれば岩を碎いて、偉大なる活動を現せずには居らぬといふは自然の勢である。靜かなるのみが決して水の性ではないのである。宗教上に於ける個人衛生即ち靜的の一面のみを見て、公衆衛生即ち社會的活動の一面を無視するものは此理を見ぬものである。併しながら、豐富なる源泉の蓄積がなければ、其活動は決して偉大にして堅實であることは出來るものではない。宗教上に於ける社會的活動の一面のみを見て他の靜的の一面を見ぬものは此理を見ぬものである。

社會

汝の義務を行へ

萬朝報は記して曰く、歐米諸國は最初に宣教師を送り日本は最初に醜業婦を送る何ぞ其反照の妙なるやと、邦人の海外に遊ぶもの、其船舶の寄港するところ、北は浦鹽斯德より南印度に至る迄、處として其影を認めざるなく、屢々赤面に堪へざるものありといふ、歐人の東洋に宣教師を送るや必ず次ぐに兵卒を以てするの一事は支那、印度等に於て殆んど慣用せられたる手段なり、最初に醜業婦を送りたる日本は即次ぐに何ものをか送らんとするものぞ、余輩は此に至て轉々長大息の嘆なき能はず「ダムローカ」は近頃同新聞に一書を寄せ「警戒せよ汝の義務を行へ」と題し日本の佛教徒に告げて曰く、日本に於ける一耶蘇傳道會は昨年中一人の改宗者を得るに平均六千圓を費せり、されば一千人の改宗者を得たるも驚くに足らず、然れども耶蘇傳道會の富は非常にして尚ほ多くを費すを得るを以て佛教徒は此點に對して深く警戒せざるべからずと、一外人の言といへども其佛教を思ふの厚き實に感ずるに餘りあり、頃者邦人の支那開拓の重任を負ひて行くもの教育家あり、實業家あり、政治家あり、國民の舞臺は漸く島國を離れて漸次大陸的ならんとするの徴あり願て佛教徒を見るに、外、進取の氣風なく、内、汝の義務を行はず、其勇や一醜業婦だも及ばず其陋や寧ろ聞くに堪へず、希くはダムローカの言に聞く所あつて其惰眠を警醒し、而して能く汝の義務を行へ是れ實に余輩の切望するところなり。

學生督勵會の設立

相澤祖明、深澤古山、柏原弘道の數氏發起となり、學生の腐敗墮落を矯正するの方法として、學生督勵會を設立し本郷區駒込千駄木林町二四四に事務所を置けり、即學校と家庭の聯絡を保つための機關にして、學校内に於ける學生の成蹟、品行、缺勤、遲刻下宿の費用、他出外泊等凡て本人に關する調査報告をなし以て墮落に陷らざらしめ女學生を督勵せんとす、右主唱者たる三氏は目下、下宿屋等をも調査し、確實なる下宿業者にして營利を目的とせざるものを家庭下宿會員とし、可成善良なる下宿屋に學生を宿泊せしめんがため盡力奔走せらるといふ、余輩は此種の事業の起らんことを希望するや久し、願くは主唱者諸氏熱心に其事業に從事し以て其目的を貫徹せよ

矢野龍溪の『新社會』

矢野龍溪氏先頃「新社會」と題する一書を著はし更に社會改造の實際的施設を經營せんとするの心ありとの報、喧傳せらるゝや、圖らず此一書は讀書社會に歡迎せられ、今や數版を重ね、其賣れ高「一年有半」以來稀に見る所なりと稱す、兆民は一年有半に最後の運命を止め、遂に呼べども歸らず、龍溪今や新社會を出す、彼は是によりて果して復活したる經世的人物として活動すべきか、抑〻又、最後の經國美談として遂に青山の一隅に老ゆべきか是れ頗る疑問なりとす、思ふに誤解せられたる社會主義は氏の著書によりて多少の光明を與ふべく、氏にして若し立つあらば、或は意外の贊助者を得るや未だ圖るべからず、只吾人が此一書を讀んで大に感ぜしところは、新社會に於ける法律教育と題する一章に於て、新社會の教育費は一國の歳出入にて第一に位し、陸海軍費の二倍の上るべきことを理想としたるの一事にあり、此一點は優に氏の理想の稍々現時の政治家より高きを認むべく、陸海軍の擴張や、土木工事を以て國家の急務なりとする一部の論者に比すれば大に余輩の心を得たるものあり、然れども是等の理想は固より遠き將來に於て實現せられ得べきものにして、氏が現在行はんと欲するものは四級團（即勞働者等）の人民が疾病の時は食料を得、醫藥を得るの方法を設くる等五箇條にして其第四には勞力者の集配取扱所を設け全國各地を通じて其需要供給を平均し彼等をして職を求むるに窮せしめざるの法を設くる事の如き、余輩が本誌第八十五號に於て論じたる公益事業としての勞働紹介と稍々其歸を一にするものなり、其他簡易教育の法を設けて其知識を開發すといへるが如き、又宗教家の看過すべからざる社會事業なりといふべし、矢野氏が新社會に論じたる方法の如きは尚研究すべきの必要ありといへども氏が此等四級團の改善に其晩年を送らんとせらるゝは大に嘉すべき事にあらずや、

宗教界の近事

覺王殿建設に關する名古屋及京都の位置爭ひと大谷派紛擾との二は引續き佛教界の問題として世人の注意を惹くこと頗る多し、日本、二六、時事、讀賣等の諸新聞屢々論説を掲げて宗教界を警醒す、就中、日本新聞は九月十六日の紙上に於て佛教徒の通患と題し、僧侶が社會と遠ざかり俗世界には不用の人となり、熱情を冷却し名利と相關せざるを以て極致とするが如く、佛教に尚ぶ所の大悟徹底は即ち社會と隔離して孤棲獨住し、社會と絶ちて不滿を感ぜざるもの〻如しとなし其衆生濟度を忘れたるを慨し遂に左の如く云へり

彼等をして悟了一番せしめよ、煩惱を冷却し名利を放擲するは人心を死灰たらしむる所以にあらず、夫の人類に對する同情をして殷々火より熱ならしむる所以なるを、心火をして煩惱に分たしむる勿れ、心火をして功利に分たしむる勿れ注ぐ所は人類に對する同情一處に在り、と是のみ

と蓋し佛教徒の通患として傾聽すべきの言なり、同月十八日には亦大谷紛擾の解決と題し大谷派革新復興の機は此機を逸せざるにありとなせり、吾人は大谷派の爲め紛擾の鎮靜して清明の天地を開き其解決の根本的たらんことを希望するものなり、

海外時事

◉在外國獨乙學校

獨乙宰相ビュローが外國に在る獨乙學校に對して保護費の增加することに付て報道しておいたが、愈々次期の帝國豫算に增加することに見積りをしたらうである。最も伊太利の如きは財政裕ならざるにも拘はらず、こういふ事には力を盡してゐるから、獨逸の如きは無論當然の事であらふ。

◉伊太利の犯罪調査

此頃同國の新聞紙は最近犯罪の調査をかゝけて居る、則ち千八百九十九年には八十二萬六千百九十五件で非常の增加である、其中三十二萬三千七百二十一件は遊暇罪の部類に入るべきもの、他の五十萬二千四百七十四件の中で謀殺殺と毀打致死は段々減少し反之所有權に對する犯罪は段々增加する傾向となる、窮乏は十二萬六千八十七件、强盜及恐喝取財が三千百二十一件である、奇妙な事には犯罪は各地方によりて著しく差異のある事である、南部地方は概して犯罪が多い、例は謀殺殺及毀打致死の場合には南部のシヽリ等にては十萬人に付四十人、パレルモにては十萬人に付三十九人、中部のローマは十四人又北部のパヴィヤは同二人である、つまり、南部と北部と一見して顯別の程度が異ることが容易に見定め

井ルヒヨー博士

ルードルフ、ウイルヒヨー博士は、病理學者、人類學者として當代の一大家たるのみならず、自由主義の代議士として亦有名なる政治家たりき、博士は一千八百廿一年十月を以て生れ、二十六歳にして伯林大學の助教授となり、後二年を經てウエルツブルヒ大學の聘に應じて教授となり、一千八百五十六年再び轉じて伯林大學の教授兼病理院長となる。本誌第八十五號『の社說に於て引用したる、彼の細胞病理學（一千八百五十九年）は近世醫學の基礎を定めるものにして、實に醫學界に於ける一新紀元を開きたるものなり。

過日逝去したるルードルフ、ウイルヒヨー博士は、病理學者、人類學者として當代の一大家たるのみならず、自由主義の代議士として亦有名なる政治家たりき、博士は一千八百廿一年十月を以て生れ、二十六歳にして伯林大學の助教授となり、後二年を經てウエルツブルヒ大學の聘に應じて教授となり、一千八百五十六年再び轉じて伯林大學の教授兼病理院長となる。本誌第八十五號『の社說に於て引用したる、彼の細胞病理學（一千八百五十九年）は近世醫學の基礎を定めるものにして、實に醫學界に於ける一新紀元を開きたるものなり。

彼亦政治界にありては進歩黨創立者の一人にして一千八百六十六年以來普王國及帝國議員となり、また一千八百八十年より一千八百九十三年迄は帝國議會の議員となり大に其手腕を振ひたりき。一千八百七十三年以來普王國及帝國に於て起りたる政府と教會間の爭を稱して所謂開明戰爭と名けたるは、彼の言に濫觴したるものにして、爾來政教の爭議を意味する熟語となるに至りぬ。

彼はビスマルク公と好らず、公の政策には常に反對したるを以て、いたく憎惡せられたりといふ。要するに彼は現今の科學及び社會の進歩に對する最も多方面の人にして、慥然社會より推重せられたる人也、享年八十二歳

ちる、此が原因は氣候に關係するからでもあらふが、一体南部地方が教育が不完全であるから小學校の如きは殆と有名無實の狀態で從て過半の人民は目に一丁字もないものばかりで、犯罪の多いのは敢て疑ふに足らぬ、

耆教新聞は之を以て伊太利人の宗教心の衰頽に歸して居る、この說に對して新教の新聞は之を駁擊して伊太利南部は加特教の勢範の土地であるから迷信が盛に行はるゝ、それが爲め犯罪が附著して行はるゝのである、强う宗教心の衰頽した譯でないといふてゐる、是も一理ある言ひ草である。

◉佛國のオルデンとスパニヤ

此頃佛國教會問題は益々火の手が盛になつて來たが、佛國のオルデン僧が段々スパニヤの方へ入り込んで行くやうになつたから佛國堺における知事より政府へ上申をした、うこて政府は法律の命令に服從するならばオルデン僧の住居するを許すが、若し從はざる時は即刻放逐せよとの命令を下したそうである。

◉匈牙利の人口調査

千八百九十年には千七百四十六萬三千七百九十一人の人口があつたが千九百年には千九百二十五萬四千五百五十九人となつた、即ち百七十九萬七百六十八人增加して百人に付十一人の割合となつた、此調査によると都會の人口が著しく增加した、うしてマジアル人種（匈牙利本來の人種）殊に增加すると共に獨乙人種は著しく減少の傾向があるといふ事である。

◉加特力の乞食主義

ペイエルのラインハウゼルと言ふ片田舎に加特教の古き教會がある、この司教者たる某牧師は之を新築しようと思ふて、兼て慈悲事業に寄附する二萬六千の貴嬢に向け宗派の區別又は教會の所屬如何に拘はらず歲損金所望の手紙を憶面もなく差出した、それが如何にも厚ケま厭乞食的文句を并べてあつた爲め新聞の新聞は嘲笑的に之を揭げてあつた試に少しく意譯して見ようと思ふ、

余の常に尊敬を拂ふ貴嬢諸子よ、私はフロックコートやシルクハットの禮服姿で伺候せればなりませぬが、目下の場合餘儀なく紙面を以て御願申されればならぬ、貴嬢諸子は必ず私の願意をむげに斷る樣な不親切の御方でないことは萬々信じて居ります。

かく申ますと、何で御座ますかと貴嬢諸子が御問ひになるでしよ、私は多くの人が來るより去るのを望んでをらるゝ人間最下級に屬してゐる、不幸の地位にある乞食です、

何に乞食！、

左樣如何にもさうです、

貴嬢諸子が定めし美しき眉に皺をよせるでありませう、併し其際は充分伸ばして貰ひたい、それは通常尊い事を意味せない、且つ令夫人には似合はしからぬ事と思はれます

君は何の爲めに乞食をなさるのです！、

私は加特力教の爲めに乞食をするです其事情が次に述べますが、たとへ私と宗派を異にしますとも不思議に思はぬ樣願ひたく存ます、

私はラインハウゼンと云ふ處で凡そ五千人斗りの教團で牧師を働いて居るものである、此教團の大部分は勞働者のみであつて、今の處では四百六十人より教會に入ることが出來ませぬ、うこで奥行六十メートル間口二十三メートルの教會を極手輕に建ようと思ふて其經費を見積りてみました處ザット十四萬マルクの豫算である、貧困の勞働者は皆出金し得る丈既に盡くしてゐるから、今更彼等より望むことは出來ませぬ、ソコテ私は我獨乙國に於て二萬六千人の慈善心深き富裕の貴嬢諸子のあることを思ひ付きまして御依賴申たる次第てある、

多くの貴嬢諸子よ一人宛二マルク若は半マルク御贈與下さつたならば、如何にも好都合であります、貴嬢諸子は之が爲めに貧しくなるといふ憂ひなく、我々は之が爲めに却て大なる目的を遂げらるゝことである、私は私一人より願ふのではありませぬ、教會に入ることの出來ない、七百人の小兒も小さき手を擧げて、慈愛深き奥樣方よ、ドカゾ一個の瓦を寄附して下さいと御願ひ申す次第であります、

如何です!!!私のこの切なる御願に對して貴嬢諸子は背くことは出ますまへ我々は愚人に對して宗派の異同を問はず、每日神に祈りを上げます、云々。

隨分思ひ切つたる乞食的文意である新教側の新聞が冷笑するも無理ならぬ事であると思ふ。

雜録

監獄未來の夢物語

筑涯閑人

第五回（犯罪病學の一大發明）

彼れ此れして居る内に最ふ六時になつた、聯合倶樂部會の開けるまでにはまだ一時間の餘裕がある其間に尙ほ一つ見せるものがあると云ふので泥長君に誘はれて監獄玄關前の廣庭に出でんとした一刹那に出し抜けに大砲の音が耳を掠めたので一時は腰を抜かす計りに仰天したのである、餘まり驚いたので物も言へず、唯だ目をパチクリして居る瞬間に又も第二發が轟然と響いたので殆んどもふ人事不省、生きた心地もなかつた程に喫驚した、漸くのことで我れに歸つて忙然立留つて眺めて居ると劍と鐵砲で嚴然と武裝した一隊の群衆が向ふの方から列伍を整ひて進行して來たのである、段々樣子を聽て見ると是れが則ち軍人倶樂部に屬する一群であつて毎日午後六時乃至七時の間に於て兵式演習をなすの例規であつて其れを見するが爲めに僕を此處に引つ張り出したとの事が分つた、前以てそうと斷つて置て呉れたらこんなに驚くことはなかつたものを、泥長君も隨分人の惡るい男である、事情を聽て安心はしたものゝ胸の動悸がなか〳〵止まぬ、顏色も從て餘程惡かつたものと見へて、泥長君も氣の毒に思ひ兎も角醫者の處へ行つて一時休息したら善からうとのことで僕を其處へ案内して呉れることになつた。

醫者の事務室と云ふはてうど泥長君の部屋と隣り合つた監房である、醫者は典獄と敎誨師と相鼎立して監獄の三尊とも云ふべき大切の職務を有つて居るものと聞いたが醫者に限つて之を監房に住はせると云ふのは可笑しいことだが、是れも矢つ張り囚徒の便利を計つたことだらうと思つて試みに其譯を聞て見ると豈計らんや、此れ醫者も同じくまた囚徒の一人であるげな、尤も此外に所謂監獄醫と云つて官から月給を拂つて判任待遇とか奏任待遇とかの名義で傭つて置く所のものもあるが是れは重もに下等社會に屬する貧囚徒の爲めに施療（アフメン）醫と云つたやふな資格で設けられてあるので、高が五十圓や六十圓で縛ばられて居る位の醫者であるから何ふせ碌な腕前を持つてる筈はない、勤務だからとて極めて不規則なもので、雨が降るつて休み、風が吹くつて休み、稀に自宅へ感冒の病人が來たと云ふ報知を得たちふので、囚徒にどんな急病人があるからつてそんなことには頓着なく颯々と退廳する、甚しいのは人に印形を托し出勤簿に捺印だけ爲せて置て自分は宅に引ッ込んで居る、典獄が折角心配して官費で監獄醫學の研究にでも出してやれば肝腎の本人は一切お構へなしで何處ぞへ遊仕度の運動に憂身をやつす、診察だからつて、ホンの型ばかりの眞似事同樣なもので診察ない前かられ醫者の胸では投藥の處方が極つて居るのだから藥劑師の方でも氣を利かして、チャンとすでに何人分と云ふ藥が調劑せられて居るやうな次第である、實菱劑の一ヶ月間持續、糖尿病患者に葛湯の給與、肺結核の轉歸經過が二日間、死亡の病名が眼病疝氣、赤酒が香竄葡萄酒、ブランデーが氣が抜けて居るので藥瓶のベーバに武酒とある、若し檢閲官にでも詰問せられたら「ランデー」去つて「武」殘るの意味だと答辯する積りだとはチト請取り惡くい咄である、其僻せ議論でもさせるとヤレ監獄の食物が保健成分に不足だとか、榮代の三錢を五十錢までにも增額せざるべからずとか、病食設置が俗論だとか、結核患者は闇室に密閉して嚴隔せざるべからずとか、癲癇患者は分房に離隔拘禁せざるべからずとか、行刑旨義などの俗論には一切頓着なくソレは〳〵非凡の名論湧くか如くの氣焰である、暑中などには隨分此氣焰に中毒して頻死の苦みを受くる者も少からぬので、監獄官吏を始め囚徒にいたるまでも先づ成るたけ之れに近か寄らぬやう所謂障はらぬ神に祟りなしで段々敬遠主義を取て來たのが基で、今日では終に監獄醫は上層の方に住む囚徒―新參、初犯、赤貧、短期の者のれ抱へ醫者のやうな鹽梅に祭り上げられて仕舞つたのであつて、役人を始め下層に住む所謂上種種族に屬するの囚人は今日ではすべて囚徒で開業して居る醫者の治療を受くることになつたのである、其處で噺しが前に戻るが余の今泥長君に紹介せられたドクトルと云ふは元は醫學社會でもなか〳〵有名な人で色々斯學に有益な發見もしたことのあつたのだが餘まり熱心の過ぎたが爲めに終に其れが源因で監獄に拘禁せらるゝの不幸を見るに至つたと云ふ其大略はコーである、昔し伊太利にロンブロソーと云ふ醫者があつて始めて彼の刑事人類學派と云つて一時、室の花の咲いたやうに各國到る所に全盛を極めた――自分の事を犯罪骨格を有する下等人種だと謂はれても平氣で此學說を歡迎した我國の學者の不見識と云つたら實に唾棄をはきかけてやつても飽き足らぬ――心地のする其新說を唱へ出したのであるが結局は犯罪者は一種の病人であると云ふに止まり其病氣はドンな性質のもので又如何なる方法に由て之を治療することの出來るものであるかと云ふ點に就ては毫も研究する所がなかつたのである、其れを發見したのが即ち此ドクトルで、先生の研究に依ると犯罪病は全く傳染病の一種であつて黴菌の作用から起るものである、即ち先生は生者の糞尿、死者の頭蓋等を分析剖檢して一種の犯罪パチルスなるものを發見したのであるが、此パチルスの内にも殺人「パチルス」「窃盜パチルス」詐欺「パチルス」收賄「パチルス」など色々の種類がある、所が此パチルスは兎や「モルモット」の樣な動物試驗では一向に其效果を見ることが出來ないので、先生

何んとかして之を人間に試驗して見たいと思つたのである、其處で試みに此事を精はしく書面に認めて內務省へ請願して見た所が時の當局者はヤレ虎列刺の豫防注射だとかヤレ血精注射だとか些こしも學理上の根據のない山師的同前の新法を躍起になつて歡迎して居るにも拘はらず此一大發明を全然拒絕して顧みざるのみか請願者は精神に異狀ある者ではないかと認めて內々其筋に警戒を命じたとのことであつた、こんな樣樣であるから先生も悉く失望して時勢の不可を嘆息して居つたのであるが、てうど其頃當監獄で監獄醫を探がして居ることを友人から聞いたので監獄とあれば尙ほ實地に就て犯罪病理を研究するにも便宜多からんとの考へから、早速志願を申込んだ所が監獄の方でも兼て知名の醫學者であることを聞いて居るので恰かも堀り出し物でも爲たやうな心持で容易に奏任待遇月俸百圓で採用のことに嘶しが纏つたのである、愈々出勤と云ふことになつて多數の病囚に接して見た所が何ふか一度自分の研究を此奴に實驗したいと云ふ念慮が起つて最ふ矢も楯も溜つたものでない、終に或日のことであつたが、一人の病囚を捉まへて窃かに其肩胛部の邊りへ兼て製造して置いた殺人「ベチルス」液の三分計りを注射したのである、所が、藥液の効能忽ち現はれ——寧ろ豫期以外に——注射を受けた男が其日の內に一人の看護夫を叩き殺し尙ほ其外に數名の者に重輕傷を負はしむる慘劇を演出することになつて、其れから段々詮議が嚴してなつて終に先生の惡事露顯に及び、先生が下手人、病囚——注射せられて人を殺傷した男——か器械も同前、無意識に働いたと云ふ廉で以て賢明なる陪審官の捌で一方は無罪、先生に對しては到頭終身懲役の處刑を宣告することになつた、其れで先生、今度は囚徒として監獄に醫業を營むことになつたのであるがすでに犯罪「ベチルス」を發見した以上は進んで之を豫防又は撲滅する方法を發見したいと云ふ熱心で段々深く研究を盡くす所あつた結果、此頃になつて終に其藥液を豫見したとのことである、但し其藥液は「モルヒヲ」「ストリキニネー」と云つたやうな毒物で此毒物に遭へば犯罪「ベチルス」も到底其生存を保つことが出來ぬ、其代はり犯罪「ベチルス」と共に人間も亦た消滅するや否やは保證の限りに非らずとはなんだが少こし心細いやうな感じもする、こんな面白い長咄を聞いたので終に一滴の藥も貰はずに僕の健康も全く回復するに至つたのである。

◉三十萬弗　獨乙のヘツセンに住する或一夫人あり、富豪家の一人娘なりしが、不幸幼にして早く兩親に別れ、其遺產の大部分は後見人の某か相場に失敗したるを以て遂に破產の不幸に立ち至りぬ、次て其後見人も世を去るに至りぬ、然るに此後見人に一人の弟ありて兄の破產と共に嫌疑を受くる身となり、遁れて米國に渡りて紐育に居を定め、或商法を始めしに運よくもめきく〳〵と財產をふやすに至りしが、此人も亦不幸にして先頃永眠の客となりたるを以て、其遺產三十萬弗と許多の地面は最の一人娘なる獨乙ヘツセンに住する夫人の掌中に入るもゝなりぬ、一喜一憂とは此事なるべし、そも此夫人の從ひ果して如何。

閑文字

◉日本の牧師や宣教師は、頻りと社會主義、平民主義を鼓吹して居るから、定めし歐洲諸國の宣教師抔は火の如く熱中して居るであらふと思ふのは大間違で。社會主義者を忌み嫌ふことの甚しき意想外であるとの事だが、日本基督教者と外國の牧師と是程の相違があるとは、如何にも奇妙な現象でばないか。

◉先鞭にかいた老西郷の事に付て思ひ出したが、上野停車場を東の口より廻りて、馬鐵線路を橫斷して、つき當る處に一軒の菓子屋がある、此家の軒頭に揭げてある商標の看板は老西郷の上野銅像其儘であつて、可笑い事には左手獵犬を携へた處がよいとして、右手食麵を取りてかぶりついて居るには如何にも滑稽であるが、食麵がなくては商標にならないかしらんが、英雄をこんなにチモチヤにしてはあまりひどすぎるぢやないか、地下の老西郷は餓死を免れたと云ふて喜んでも居るまいて。

◉二十年前の東洋學者として本誌に紹介した故笠原氏は曾て東京に留學して居つた時、同室の一人か常に邊幅を修するに反して笠原氏は頗る磊落で無頓着の質であつた、或時某の許へ一個の菓子折か到來した、某は書架に飾り立てゝ敢て之を味ふことしなかつた、ソコテ笠原氏は忌まく〳〵しく思ひ某の留守の間に悉皆之を平けてしまつて、ろして口を拭ふて知らぬ顏して居つた、恰と笠原氏の不在の時郷里より某を訪ふて來たものがあつた、寒暖の挨拶かすむと、先つ恭しく茶を進め、後ち菓子をと思ふて、折の蓋を開いて見たが、豈圖らむや、いつのまにやら羽か生えてもぬけのからとなつて居つた、某はヒツクリ仰天開いた口か塞がらなかつたといふ話を南條博士は折々面白く話さるゝが、笠原氏は隨分快活な人であつたやうに思はるゝ。

◉野州宇都宮地方は概して無宗教の土地なるか、眞宗は極めて少ないが、眞言澤宗抔は隨分多いけれども一向振はない、今より十五年前宇都宮市に小規模の一の教會堂か建てられた、それは耆教の宗派で牧師も十年一日の如く今尙倦まず撓まず布教に從事して居る、はじめは布教の手段として金錢物品を惜しげもなく施した爲め一時は頗る盛大であつたが、此の頃は寂寞として人影稀である、併し確かな信者は九十人あるとの事である、十五年かゝりて九十人の信者とは算入の間に合はぬ話なれども、耆教の牧師だけありて實に熱心で忍耐で押の強いのには感服せぬを得ない、ソコテ同市の人民は此の牧師の名を云ふものなく（寧ろ知らない）誰も彼も松ケ峰の親父々々と云ふて居る、即ち教會堂は監獄の南に當る松ケ峰と云ふ處にあるからだそうである、併し此の牧師も大分貯蓄したものと見に信者の名前をかりて大分土地を買ふて居るとの事であるが、此はあまり感心仕らぬ。

視察

無料宿泊所

池山榮吉

宿泊を目的とする慈善事業の中には、有償的のものと無償的のものとある。旅行中の勞働者等を安く泊めるのを目的とする旅宿、即所謂『故郷の宿』(Herbergezur Heimat)の如きは前者に屬するもので、夫の勞働者殖民地、流浪者作事場の如き(八十四號參看)、仕事をさせて其の代り泊めてやるところから見ると、これまた此中に算へることが出來る。『故郷の宿』其他有償的の慈善宿泊所のことは追て紹介する積であるが、今日は獨逸に於ける無償の慈善宿泊所、即所謂『無宿者の安宅』(Asylfür Obdachlose)に付て御話しやうと思ふ。

衣食住の三は人間の生存に必須なもので、衣食を得る能はざる者を見殺しにするとは、政治上、道德上、爲し得るとでないが如く、住居を得る能はざる者も亦之を棄てゝ顧みない譯には行かない。で、獨逸では、一方に、各人は自己及び其の法律上養育の義務ある者の爲め住居を定むるの義務を有し、舊住居喪失後、警察より指定したる一定の期間內に、新に住居を定めず、且つ之を得んとを努めたるも得る能はざりしと

のことを證明せざる者は、六週間以内の拘留に處し、更に警察處分を以て、二年以下の期間、強制勞働院に入院を命じ得るとゝなつて居ると同時に、他方には、公の救貧機關（地方團体）は住居を得る能はざる者に宿舍を與ふるの義務を負擔するとゝなつて居る。が、無宿者の宿泊は單り地方團体の公の事業として存ずるのみならず、私の組合の事業として行つて居るところもあるので、該事業の主体から區別すると、一、專ら地方團体で行つて居るところ（ダンチヒ、ドルトムント、ケルン、アーヘン等）と、二、專ら私の組合が行つて居て、地方團体は或は幾分の補給を爲すに止まるところ（ハムブルヒ、ブラウンシュワイヒ、エルフルト等）と、三、兩者併び行はれて居るところ（伯林、ライプチヒ、ブレスラウ）とある。

無宿者には二種あつて一を夜間無宿者と呼び一を無宿家族と稱する。夜間無宿者とは即一夜の宿を求める個人を指し、無宿家族とは、一家擧つて無宿の悲境に陷つて居て、新住居を得る迄は泊めてやらなければならない家族をいふので、夜間無宿者の宿泊料は大抵設けてあるが、無宿家族の方は、特別に之を設けてある所もあるが、貧民院勞働院等と一所になつて居る所が多い。

獨逸中で一番大きい無宿者宿泊所は伯林市立の宿泊所で、是は夜間無宿者無宿家族の二部から成立つて居る。以下同市最近の報告に基いて、該宿泊所の狀況を述べやう

伯林で市立の宿泊所が始めて出來たのは、一八七三年であるが、現在用ひて居る建物は、半分は一八八七年に開かれ、半分は必要に迫られて一八九三年に增築したものである。で、現今の宿泊所は皿字の下の一のない形に建てゝある四階の正面の各階三十七宛の窓を有する非常に大きな建家と、各一棟十宛の室を有し、其各室には六十宛の寢臺を備へ付けてある四棟の平家から出來て居て、外に各一棟の洗濯場と消毒所とが附置されてある。而して平家の方は專ら夜間無宿者の爲めに使用するので、こゝには浴場（「ブラウゼバード」と云つて蓮の實を倒にしたやうなものが各入浴者の頭の上に一つ宛あつて其れから湯が落ちて來る仕掛になつて居る）の設があつて三十分間に一五〇人乃至二〇〇人を浴せしめ同時に其の衣類等を消毒し得る樣になつて居る（婦人及び病氣若くは不具の男子の爲めには別に風呂が設けてある）。四階家の方は主に無宿家族に充てるとになつて居て、事務所、役員の住宅、包厨、物置、病室等も亦この内に在る。

甲、夜間無宿者

四十の室には六十宛の寢床が据付けてあるから、二四〇〇人は手附かずに收容し得るのであるが、必要の場合には各室に尙十宛の假床を設けることが出來る樣になつて居て、都合二八〇〇人を宿泊せしめ得るのである。併それでもまだ足りない時は寢床の排列を狹めれば尙若干の人を入れることが出

來る。

宿泊者の數は年度と季節に依て大に異なる。之を統計に徵すると、一八九〇年度には二〇、三〇三九人であつたのが、九一年度には二七、五七七七人、九二年度には三三、四六七〇人、九三年度には三三、五四三六人、九四年度には四四、四七六六人と段々に增加して行つたが、九五年度は更に又三二、二六八七人に減じた。で、此各年度の宿泊人員を日割にすると九〇年度には一日平均五五六人、それから七五五人、九一四人、九一九人、一二一九人と上つて來て、九五年度に至つて八八四人となつたのである。

右の六年間で宿泊者の一番多かつた日は、一八九四年一月二十七日で、三一三八人、一番少かつた日は、一八八九年六月八日で、一五三人とある。それから宿泊者の一番多かつた月は矢張一八九四年一月で、總計八、二二七六人、一番少かつたのは一八八九年六月で、總計七七三〇人である。是に由て觀れば宿泊者の數は冬季は夏季よりも遙かに多いことがわかる。

宿泊者は男子の方が女子よりも遙かに多い、一八九五年の宿泊數總數三二、二六八七人の内、女子は一、五八二四人しか居なかつた。

宿泊者は必ず入浴すべく、且つ其の衣類は必ず消毒されることになつて居る。但し前晩に泊つた者は必しも然うせずともよいことになつて居る。一八九五年度に於ける入浴者の數は一六、九二六〇人で、消毒した品數が四九、八八二八箇とある。

各宿泊者に給與する晩食と朝食とは、共に一皿の麥粉の汁と黑麵麭で、之が爲め一八九五年度に支出した額は二、六四三馬克、即一人前、約我が四錢の割合である。

宿泊は三箇月間に一人四回以内に限り之を許すは規則であるが、此規則は實際上勵行されて居ない、而して一八九五年度に於て、初めての宿泊者は一、一六〇四人にしか過ぎなかつた

伯林では右に述べた市立の宿泊所の外、私の組合事業としての宿泊所がある。この宿泊所には苟も酔漢若くは傳染病者に非ざる限りは、何等の取調を要せずして、何人でも宿泊することが出來て、且つ其人は自分の名をだに言はずともよいといふことになつて居る。是は所謂匿名主義といふので、此點は市立のと異なつて居る。市立の方では形式上にせよ兎に角一應申請者の陳述々聞て調べるのが規則である。

此の組合の宿泊所もなか〳〵大仕掛で、一八九八年には二三、二五五五人を宿泊せしめたといふことである。尤も其の大部分は互違に市立の方へ行たり此方へ來りしたものと見て大過はないので、無宿者に採つてはまことに都合のよい樣に出來て居る。

一抑もこの匿名主義を採つて居るのは右に述べた伯林の私立宿泊所ばかりでない、他にも大き宿泊所で該主義に依つて居るものが多いので、近時之に對する批難が大分八釜しくなつて來た。匿名主義を主持する者の唱ふる所は、「寢るところもない程に落魄れた者は實に憐むべき境涯にあるものであるから、彼等に對しては何事も大目に見てせめて一夜の間なりともやすやすと息めるやうにしてやらなければならぬ、然るに一々其身元をとりたゝして、差恥と危惧の念を抱かしめるのは、稍〻酷といはざるを得ない、殊にその保護の費用といふも僅少のものであるし、且つ何も金錢を施したり、長らく止めて置くといふのでない、たゞ一夜の宿を貸して朝晩の食を惠むといふにすぎないから、之に依て濫施の弊の起る氣遣もなからふ、それだのに宿泊者の名前を書付けたり何かするのは手數ばかかゝりつて甚だ割に合はないではない」かといふので、之を批難する者は「宿泊者の名前を聞くを避けるなどゝいふのは畢竟婦人の仁で、事情を調べないで宿泊を許すは、無暗に施をすると一般、健全なる救貧の原則に違背して居る。其弊は却て慈善に寄食する遊惰の風を助長する結果を來す、殊に伯林、ハムブルヒ、ライプチヒの如き二箇所以上宿泊所のあるところでは、各宿泊所で月何回といふ工合に宿泊の制限を立てゝ居ても、宿泊者の名前もきかぬとあつては到底監督のして見やうがない、それからまた、費用の點にした所で、成程一人一宿の費用は如何にも僅少なものに違いないが、それが度重なれば大きな額になるので、筆記の手數など割に合はないといふけれども決してさうでない、殊に初めて宿泊所に來たものゝ如きは、將來再び墮落の淵から浮び上るか、將た其儘沈淪して了ふかの瀬戸際にあるものであるから、若し其事情を調べずに了ふならば、尙援ひ得べき道があるにせよ、知らぬがまゝに棄てゝ置くといふ結果になるではないか」といふので、『救貧慈惠協會』の如き大に此說を主張して居る。

乙、無宿家族

伯林市立宿泊所の無宿家族の部では、六〇〇人を收容し得る準備が出來て居る。

此所には救貧廳若くば警察の指定した者に限り之を收容することになつて居て、彼收容者は三度〳〵給養を受ける代りに課せられた仕事を爲す義務を負ふて居る。

家族は一室内に同居するのではなくて、男子部と女子部に別れて住ふので、男女の家族間の交通は、其間一定の面會室でなければ出來ないことになつて居る。而して外來の訪問客に接するには、特に許を得なければならない。

被收容者の數は年度に依て隨分相違がある。例へば一八九三年度に入つて來た家族の數は二五五〇で其人員は八五〇三人であつたのが九五年度には家族の數一七二六、人員五七八四に減じた。

家族部には單り家族のみならず個人をも對からず收容するので（尤も之に對しては個人をこゝに收容して、家族と同樣の取扱を爲す必要はないと云ふ批難がある）一八九五年には個人で家族部に收容された者は二〇四九人である。

一八九〇年乃至一八九五年の六年間の統計に依ると無宿家族及び家族部に收容された個人を合せて一日の滯在者平均二五七人の割になつて居る。

一八九五年度に於ける被收容者八一〇〇人の滯在者日數は八、九八四八日、即一人平均十日餘の割で、之が爲め支出した給養費は三、四二七三馬克、即一人一日平均約我が二十錢に當つて居る。

同じく九五年度に於て被收容中二九一五人に、其の宿泊所を去て他に借家するに付ての補助として、二、六六九八馬克即一人平均約五圓を支給し、尙二〇三の場合に於て、家賃滯の爲め留置された被收容者の諸道具類を解除せん爲め七五五五馬克即各場合平均十七圓餘を支出して居る。

同年度に於て收容された家族で、初回の者は一四七〇、第二回目のものは二七二、第三回目の者は三五、三回以上のものは一五で、家族部に收容された個人の中一六六八人は初てのもの、三五九人は第二回、五三人は第三回、一六人は三回以上の者である。

家族の子供を敎育せん爲めに、宿泊所内に學校が設けてあつて、一八九五年度に敎育を受けた子供の數は一三〇三人で、毎日の生徒數は平均三二人とある。それから二週間に一度宿泊所附の敎師が宿泊者を一堂に會して禮拜を執行するとゝなつて居る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

無宿者となる原因は固より種々雜多であるが、元をたゞせば、仕事を墮ると、飲酒に耽ると、放蕩、輕卒、不信用、不規律喧嘩好等、多少自己の過失に基くものが多い。けれどもまた火災とか、疾病とか、家父の死去とか又た恐慌に由る勞働の缺亡とか强ち責むべき過失なくして無宿者となる者も亦尠くない。殊に地方から都會に出て來る者が年々歲々益々殖にて行くのは近年一般の趨勢で、其結果都市の住民が餘りに急激に增加するとがあつて、一時住家の不足を告げる樣なともある。所謂「住居問題」とは主として之が解決を試みるものである。

無宿者であつて、而も仕事を爲やうといふ氣のない奴は刑法上及び警察上で處分し取締るより仕方がないが、否らざる者は、縱し其の無宿者となつたとが、己の過失に基くものと雖も、之を自業自得として顧みないのは人道の上からも忍ぶ所でないし、また公安の上から見ても得策でない。餓えたる者には食を與へなければならぬが如く、寢ぬるに家なき者に

は何うしても宿を貸してやらねばならぬ。であるから、倫敦巴里、紐育等の大都會では、孰れもこの宿泊所の設のない所はない。我が東京の如き未だ歐米に於ける都市の如く深く其必要を感ぜざるは幸といはなければならないが、追々工業の發達し、家族制度の解弛するに連れて、段々と其の必要に迫られる樣になることは見易い道理である。現に淺草なる無料宿泊所の如き、創立日尚ほ淺くして廣く世間に知られて居ないにも拘はらず、毎月數百人を宿泊せしめて居る。是に由て觀れば宿泊所の必要は事實既に迫りつゝあるも、社會は未た之を感知しないのかもしれぬ。惟ふに夫の所謂木賃宿、安泊なるものゝ狀況を詳に視察したならば、或は思ひ半に過ぎることがあらうも知れぬ。

宿泊所の設定の必要なるは斯の通りであるが、其の遣方如何に依ては、却て遊惰の風を助長し易いことは前に述べた通りである。で、此點から見ると夫の勞働者殖民地、流浪者作事場の方が、比較的健全な方法なので、宿泊所は原則上、是等の方法を盡して尙ほ手廻はらないところを補ふもの、即已を得ざる最後の手段たる地位にあるべきものである。而して宿泊所の目的を完ふせんが爲めには、宿泊所と勞働紹介所（八十五號參看）との連絡を十分に保つことの必要なるは、讀者諸君の直に首肯せらるゝことゝもふ。さて斯う論じて來て見ると、我徒は宿泊所の必要を感ずるにつけても勞働者殖民地、流浪者作事場の利益を思ひ、同時にまた早く健全なる職業紹介の制の完備せんことを望むのである。

講演

讀『學談雜錄』

眞岡湛海

佐藤直方といふ人は備後の人で字は五郎左衛門といふた、山崎闇齋の門下で淺見絅齋、三宅尙齋などは其友人である、嘗て言ふには、博覽强記、能文善書、宋の蘇東坡に若くものはない、然れども得道の人より見れば東坡固より論ずるに足らず、故に學者其識見、東坡を以て俗儒となすに非れば聖賢の地位に至ることを得ない、多識及詩賦文章皆之を善くせんと欲するものは、世を終るまで眞儒たることが出來ないものであるといふて居た、其學談雜錄といふ書は兎に角一種面白い識見を具へて居る樣である、その中にこういふことか書てある、一商人魚を買ふ時にあまりしわい男故に魚を吟味するとて眼鏡を掛て見て代何程といふ、魚賣まけずに外へ出て、しばらくして歸て最前の魚まけませふといふ、彼しわき男其魚を見て是は今見た魚ではない、最前の大なるは他人に賣て小きを持て來て身どもをだます、沙汰の限りと云ふて呵る、魚

賣大に腹をたて偖々こなたは人を盗人にさつしやらるゝかと云、亭主猶怒りて大を小に取易るは盗人にあるまいかといふ魚賣、以ての外、腹を立て、此男を盗人と云やるかとつかみつく、餘り聲高になる故に隣人來て取をさへあつかふて兩方の云分を聞く段々を聞て、隣人笑ふて曰く、兩方共に如在はない、是は料簡違也、最前魚を看られた時は、眼鏡を掛て見られたゆへに魚が大きく見ゑたもの也、後に眼鏡をはづして居られた所へ魚を持て來て見せたゆへに前方より小さく見ゑたもの也、魚賣も取易はせず亭主の取易たと云はるゝも、無躰に云掛をしたでもない、あやまちは眼鏡にあり、惣じて眼鏡と云ものは、大事のもの也、つかい塲がわるければにがくしきことになる、國家の政をする役人衆の仕方を見るに皆眼鏡の掛塲がわるいと存ずる、上から下へ下さる時は、龜相に吟味なし、眼鏡掛ずに下され、下から上へ上る物は、偖々吟味をかけ眼鏡をかけて見らるゝ、實に哀むべし、上下ともに眼鏡の掛塲を明むべし、眼鏡の掛所が違ふては盲目にをとりたるものである、よくくく慎まねばならぬといふ意味のことが書てある、實に面白い、我々が近眼の眼鏡をかけて見るときは何だか世界のものが凡て小さく見ゑるし、老人の眼鏡をかけて見ると、餘程大きく見ゑる、それが、近眼や老眼の人が調度自分の度數に合つた眼鏡をかけるとどうかこうか工合能く見ゑるのである、その中には或は金緣の眼鏡もあり、丈夫な鐵緣のもあり、大きな蟲眼鏡もあり、零度といふ樣な極近いのもあり、鼻眼鏡もあれば、片眼鏡もある、そうしていつの間にか、眼鏡をかけて居ることを忘れて立派な眼玉を持て居る樣に思ふものあれば、又は魚屋と喧嘩する樣な、眼鏡の掛け所が違つた爺樣もある、人の身の上を見る時は眼鏡をかけて細く吟味し、自分の身を顧みる時は高慢の鼻眼鏡をかけて居ることの氣付かぬ人もある、本來人間は其教育や、學問や、知識や、性質や、境遇や、種々の事情によりて、多少皆各々色の變つた眼鏡をかけて世界を見て居る、色が赤とか紫とか違つて居るばかりでなく、其度數も九度とか十度とか皆違つて居る樣である、境遇が人を作ることもあれば、人が境遇を作ることもある、佛法に八萬四千の機に對して八萬四千の法を說くといふも、四百四病に對して四百四種の藥を要するといふも百人の人間が、百人ながら違ひ、百人の病氣が百人ながら多少違ふからである、則各人の考へもつまり違ひ、各人の宗教も、各人の主義も畢竟皆同じからぬ樣である、此等の考は一面は其內部にある本來の性質から來り、他の一面は其外部に於ける境遇から來るのである、此に境遇といふのは、家族も友人も氣候も風土も、草木國土の自然界の出來事に至るまで凡て含まれて居るのである、どの樣に快活な人でも、雨の降つた陰鬱な天氣の日に終日唯獨り閉ぢ籠つて居るときは、必ず寂しい氣の塞いだ樣な考へが起つてくるもので

ある、雨が降るとか、風が吹くとか天氣が惡いとかいふ樣な些々たる天候の變化でも尙人間の心をして、或は陰鬱ならしめ、或は不滿ならしめ、或は寂寞ならしむるのであるから、人間に血液の循行して居る限りは人間は存外、神經的な感覺の鋭いものであるかも知れぬ、無意識な自然界の出來事ですならも、此の如く我々に影響するから、意識的な生きた人間が我々に與ふる影響は大なるものである、殊に修養の未だ足りい普通の人間は勿論であるが、時として英雄豪傑といはるゝ樣な人であつても、假令ば人が己を賞賛してくれる時は、何となく嬉しいものであつて、惡くいはれるときは何となくいやなものである、「天下好諛の人ならざるなし故に諂風止まず、世間悉く是れ善毀の輩、故に讒路塞ぎ難し」で滔々たる流風は、阿諛と讒毀で充されて居る、此人間の弱點に乘じて或は諂ひ、或は謗り、之に依て人を疑ひ人を傷けて喜んで居るのは、實に遺憾なことである、人間は誰でも自分はゑらいものと思ふのであるが、自己に諂ひ他人に諂ひ、又は他人を謗つたりして居る淺はかなる心情を以て居ることを思ふと、ゲーテの言ふた樣に外見甚だ大きく見えた樣な此巨人も、實は小さい局量の狹い矮人であるといふことを直に感ずるようになる、つら〳〵世間の爭ひを考へて見る時は、皆此矮人の爭ひである、小人の爭ひである、其立派な樣な議論も、其筋みちの立つた樣な理屈も、或は眼鏡を忘れて、魚屋と喧嘩した爺さんを去ること餘り遠くはないかも知れぬ、利己とか自利とか云ふ樣なことのために、眼鏡が曇つてしまつて正邪善惡の見えない樣になることがないとも言へぬ。

抑々宗教は議論ではない理屈ではない、議論や理屈や、說明や解釋は、目的でなくして只安心を得るに至る手段である、一生涯手段の研究に終つて、遂に其目的たる一大要點を忘れてはならぬ、若し人此點に思至るときは、ファウストと同樣に、神學や哲學や、醫學や法學や、樣々のものを研究したが、結局何の得る所がなかつた、實に人間は馬鹿なものであるといふ樣な嘆聲を發するであろう、デカルトが我考ふ故に我在りと考へたときには今迄我といふことに付て屢々疑ふたことは實につまらなかつたであろう抑々宗教に入る第一門は信仰である、我か如來を信ずることに於て、他人の議論や說明は何も役に立たないのである、全體議論や理屈で人に勝つた所が、負けた方の人は決して其議論に心服するものではない、勝つた方は勝つた樣に思ふて居ても、負けた方はいつ迄も負けない、心から信じ、心から服するといふのはどうも議論の末技によらないようである、我が如來を信ずることによつて、我は我を信じ、我は我友を信じ、我は一切世間を信ずるの念一層深くなつた樣である、シカシながら我々はかく論じたからとて哲學的思辯や學術的理論を以て全然無用なるものとするのではありませぬ、若し人、如來の智慧光に照されて

無明の闇を破し、此に白道の一路あり、來れと招喚し玉ふ慈悲の聲を聞き、確乎不動の信心の力を得て、不退の位に住せば、以前の苦悶は無益のものであつたと考へることか出來ますが、又一方から考へますると、其最後の目的に到着することに於て、此等の理論や、考察や、苦心努力することは又大に有益にして必用なるものであると考へることか出來ます、日曜講演に於て熱心に道を傳へらるゝ淸澤先生は生死の一大問題に就て深き工夫をなし、近角君は又此人生問題に付て熱き同情を有し、共に信仰に付て少からぬ經驗を積まれた方であるから、諸君が二氏の談話を聞て其信念修養の上に利益せらるゝところ實に多いことゝ考へる、何人と雖も人は一大信仰の力がなければ、有爲轉變の世に處し、毀譽褒貶の間に立ち、自若として快刀亂麻を斷つ底の事が出來ぬ、實に信仰は力であるといふことを私は堅く信ずるのである、今日の宗教を見る人が宗教を只一局面から見ることは大に誤つて居る、宗教には深い方面と、廣い方面と二つを見なければならぬ、もと〳〵宗教は人心の奥底より溢れ出づるものであるから、其甚深微妙の域に至ては一種神秘的な事に至るかも知れぬ、推しつめて考へるときは倫理を超絶し、社會を超絶し、國家を超絶し、人間を超絶し、法律、道德、政治、科學、哲學の上に立ち、一切の世間を超絶した樣な考も決して否定することが出來ない、此に至りて或は宗教の宗教たる眞髓か發揮せらるゝのかも知れぬ、是は宗教の甚深なる方面であつて、いはゆる宗教の體ともいふべき點である、之と同時に宗教の用たる廣大なる點を忘れてはならぬ、此方面は則宗教を社會人文史上の一大事實として見ることである一方には哲學的思辯を以て深遠なる宗教の本體を見ると共に他方には實際的活眼を以て廣大なる宗教の活力を見なければならぬ、此二面の觀察を待て初めて宗教の精神と眞價を充分に認むるに至るであろうと考へる、

要するに我等は魚屋と喧嘩した爺さんたらずに、須く此雨眼鏡を具へて頂きたいのである。

報道一束

◉驟雨一過、冷氣頓に加はり、所謂天高く氣淸うして、人は衣を重ね漸く懶眠を警戒するの好時節と相成候得共、社會百般の事凡て渾沌として陰晴定まらず、此頃の秋の空摸樣と一般に候、筆執るもなか〳〵懶うく候、たゝ玆に二三の出來事を報道して聊か記者の責任を塞き可申候。

◉其後の大谷派紛擾は容易に鎭靜の摸樣無之、過日御連枝大谷勝緣師の御東上と相成候も時局益々困難を極め候樣子に見受けられ候。

◉併し社會輿論の聲は局面轉開を促すこと洵に切なるもの有之候、そは『日本』『萬朝』『讀賣』『二六』『時事』等の諸新聞紙御覽の方々は既に御承知の事と存候得者今更こゝに繰返す程

の必要も無之候、たゞ吾等は之によりて大なる教訓を得たるを喜び居り候。

◉覺王殿建設問題は徒に聲のみ高くして一向捗々しからざる樣に聞き及候。

◉近刊の『東京毎週新誌』は其社說に於て、横井時雄君の如き品性あり教養ある人か、已に傳道界を去りて、圈外遠く政治界にあるを思ふて、遺憾措く能はざるを論し、最後に後進の青年が横井君等の志望及び心情を誤解し、自ら過つて傳道を輕視せざらむことを警告致され候。獨り横井君のみならず、吾等の記憶せる多くの名士か前後相次て基督教界を去りしこと隨分有之やに覺に居り候、定めし遺憾の事と存じ同情の念に不堪候。

◉近時女學生の墮落益々甚しく新聞紙上日として彼等の醜行を摘發せざるはなし、父兄の心配そも如何に候哉、思へば情けなき限に候はずや。

◉伊藤侯爵暗殺するものありとの電話を同邸に通じたる者有之候、詮議の上、郵便局雇某の惡戲なること判然致し、直に免職せられ候由、侯爵殿の驚ささこそと推せられ候。

◉近頃獨身生活の問題なか〳〵熾盛に候、耻をも耻と思はざるいと〳〵腐敗せる現時の宗教家は將に一顧の價値あるべくと存候。

◉日曜講話は盛暑の候暫時休講致候も、今月より例の如く毎日曜開會することゝし、去る第二の日曜日より相始め候、聽者は小き室に溢るゝ程の盛況にて候ひき。

◉牛は牛づれ、盲目同士か夫婦ともに盲目の方か氣か揃うて好都合なるべきに、それが奇妙に十の八九は一方が目明にして、兩方とも盲目の夫婦甚た稀なりといふ。是は說明する迄もなく一方の目明が、懶惰にして盲目の壓をかゞるといふ寸法の由、現今の社會は凡てかゝる亂調子に組織せられ居り候。

◉新派俳句の泰斗、正岡子規氏は此月十九日を以て溘然として不歸の客と相成候、悼むべき哉、享年三十六、辭世三句あり。

絲瓜咲て痰につまりし佛哉。
痰一斗絲瓜の水間に合はず。
をとゝひの絲瓜の水もとらざりき。

◉本號に肖像を掲げたるヰルヒヨー博士はビスマルク公と相好らず、曾て勳章を授くべき人名簿の中に同博士の姓名も記載せられたるを見て、公は直に鉛筆を執つて博士の名を抹殺したる程の大の仲惡にて候由、人情は洋の東西を通して變らざるものに相見え候。

以上報道一東如斯御座候草々　　九月廿日稿

日曜講話

毎日曜午前九時より
本郷森川町一番地二
百四十號に開く。

佛弟子小傳（五）

信眞　近角常觀

尊者舍利弗　尊者大目犍連

舍利弗多羅（Çariputra）即ち舍利弗と摩訶沒特伽羅耶（Mahāmaudgalyayana）即ち大目犍連の二人は佛弟子中の英雄にして肝膽相照したる友人であつた、特に兩人修學中より學友として交厚く、人生問題に於て共に苦勞し、道友として相率ゐて出家し、遂に佛陀に見ゆて其感化を蒙り、終身宗教的同朋として相追隨し、何れも佛陀に先ちて此世を去られた人である、倩々佛弟子の傳を調ぶるに何れも其人の境遇及び家族的若くは社會的關係が如何にも美しく、麗はしく、平和なる、圓滿なる有樣は實に千古の未に至るまで、我々をして知らず識らずの間に、春光和融の世界に遊ばしめらるる心地して、渴仰隨喜の情に堪へないものがある、而して其社會的若くは家族的の關係が一般世間の人情的關係のみでなく、高尚なる宗教的關係が加はりてある、若し單に人情的の關係のみならば畢竟俗的の關係に過ぎないので、如何に愛情が溢れてあらうが、如何に交が濃かであろうが、左程の價値を見出すに足らない、されど佛及び佛弟子の傳は他の世人の傳と異りて、眞摯なる、清淨なる信仰的關係が始終一貫して生命となつて居る、實に是れ生きたる宗教として、吾人に感化を與へらるゝ點である、されど特に注意すべきは、宗教的關係なるものは、人情を斷ち切りて、枯木死灰の如くなることではない、炎々として燃ゆるが如き熱情を有し、哀々として身を犧牲にする愛心を抱きつゝ、人生の大問題に衝き當りて、大苦悶の境に陷り、人情と戰ひ、恩愛の爲めに苦しみ、遂に佛陀の大感化を蒙りて胸中の煩惱を解脫し、俗的人情の恩愛は一轉して溫かなる宗教的慈愛の溢るゝ如き情操となり、從來の社會的若くは家族的關係を莊嚴して清らかなる、美はしき宗教的生活を開くことである、從來世人は阿羅漢なる語を聞くときは血もなく、淚もない、寧ろ無感覺なる人の樣に考へるは大なる誤りである。熱々佛弟子の傳を見るに、人生と信仰との間に行はるゝ戰爭と調和とが生き〳〵として描かれてある、即ち憍陳如等の五比丘の事蹟には師弟の間に於ける摯直なる求道心と熱誠なる德音とが顯はれてある又耶輸陀の歷史は哀々たる慈親と優しき獨り子の間に於ける宗教的生活の寫實である優樓頻羅迦葉等の三迦葉は如何にも睦じき兄弟が同一の信仰を以て終始したる教訓にして、摩阿迦葉は夫婦間に於ける淸淨なる宗教的家庭の手本である、而して今描かむとする舍利弗と大目犍連とは斷金の學友として、同心一躰の

信仰的交誼を結びて、生死の間に於て變らざる永久の朋友である、幸に讀者諸君が信仰の眼光を以て、此小傳を讀み破りて、筆の回はらぬ所を心を以て補ひ玉はゞ、理想の社會若くは家族が歴々として眼前に顯るゝであらう。

王舍城を去る遠からざる所に村ありて那爛陀 Nalanda と名けた、其中にマートハラ Mathhar と名くる婆羅門があつた、其子に俱稀擺 Kaushthila といふ息子と舍利 Sari と名くる息女とがあつた、俱稀擺は順世哲學を研究するために南方印度へ行きた、此人は修學を終るまで爪を切らずと誓ふて勉強した故に、長爪梵志と稱けられた、後には佛弟子となつた人で、十六阿羅漢の隨一であつた、而して妹の舍利は南方印度より來れるチシユヤ Tislya と名くる婆羅門と結婚をして生れた子の一人が即ち舍利弗多羅 Sari putra である、是は母の名に從て名づけたもので即ち舍利の息子といふ意味である、父親の名に從て呼んで優婆低沙 Upa tislya とも名けた、舍利弗は非常の英才であつて、兄弟中に於て聰明にして嶄然頭角を露はして居つた、四韋陀に精通して、諸種の哲學を研究し、百般の藝術を窮めた、殊に其性質が柔かにして心が賢く常に悲慈を抱きた而して細心思惟する事に長じ、家政向きの事皆所理した、又王舍城を去る遠からざる所に、拘離迦と名くる聚落ありて拘離多 Kolita と名くる子があつた、此子の母がモグダルと云ふ故にモグダルの息子と云ふ意味で

モグダルプートラ Mogdalputra と唱へた、又其家族上より沒特伽羅耶那 Mandgalyayana とも名づけ是亦秀才にして若き婆羅門の長となつて居た、此二人の青年は學校に於て相會し、親しき交りを結んだ、如何なる故か此兩人は余程意氣投合したるものと見へて、暫時にても相別れて居るときは胸中煩惋の情に堪へなかつたとある、經文に兩人の交を形容して蓮花の生して水に在るが如しとあるは、如何にも美しき形容である。

王舍城を去る遠からざる諸々の山に何か祭禮の如き人集りがあつた、兩人が之を見物に行きた、多くの人々が或は歌ひ、或は舞ひ、或は諸の音樂を奏し、或は色々の戲嬉をなし、如何にも浮華放逸なる樣子を見て、舍利弗深く厭ひて、空閑なる林に入り、一樹下に於て悵怏として座し、目を閉ぢ、口を噤し、思惟を初めた、又大目犍連は會中に於て一藝人が藝を演じたるため、衆人が呵々大笑する樣子を見て、嗚呼百年の後此等の人は如何なるであらうと考へて座に堪へず、舍利弗を覓めて四方を顧み樹下に彼を見出し、相會して兩人が所感を述べた、如何に兩人の性質が眞摯であるかゞ分かる、兩人か相談して出家して道を求むることに決心した、されと父母の許を得て事を行ふことゝし、舍利弗深く其志を父母に述べた、父母は多人の子の中に特に彼を偏愛するもの故容易に許さぬ、舍利再三請ふも許されぬ故、鬱々として飲食が進まぬ樣になつた、夫故親屬及び知識が父母に忠告して曰く、彼道を求むるを樂む、獨り此處に活路を存するなり、出家を許すべしと遂に許すことゝなつた、大目犍連も父母が愛情濃かにして暫くも離すこと出來ぬ獨り子なれど、此子の望は何事も拒まぬと云ふ誓あつた故許された、かくて兩人は刪闍耶 Sanjaya 外道に學んだ暫くにして忽ち其蘊奥を極め、五百人の長となつた、されど猶未た安心の域に達せざるもの故兩人相約して、若し一人か生死解脱の大問題を解決したるときは必す他の一人に告ぐることゝして相激勵して道を求めた。

此時恰も佛陀は王舍城迦蘭陀竹園に在りて法を說き賜ひた、佛弟子阿輸波踰祇多即ち尊者正語が晨朝に於て日東方に出つるの時、衣を著し、鉢を持し、城中に入りて食を乞はれた、其威儀序序ありて進退方があつた、王舍城の人民が見て評論して曰く、巧みに諸根識を攝め、進止恒に靜定にして、笑を含みて美言を出す、此必す釋種子なりと、以て如何に正語尊者の平和にして安舒であつたかを想見すべきである、耶輸陀即ち尊者名聞か道に釋尊に遇ふた時、從ふて居つたのも亦正語尊者であつた、舍利弗深く其動作容貌に感動せられ、是れ必す眞に解脱せる聖者なりとし私かに其後に尾して行き、遂に彼に尋ねて曰く汝の威儀は明らかなり、汝の顏容は清らかなり、汝は誰の名に於て世界を遁れたりや、汝の師は誰なりや、汝は如何なる教を學びしやと、阿輸波踰祇多答て曰く、我師は大沙門釋種子なり、彼は釋迦家を遁れ、世界を棄てたり、彼の高き名に於て予は世界を遁れたり、予は彼の高き教を知れり、舍利弗問ふて曰く、願くば汝の師が言ふ所のもの教ふる所のものを語れ、阿輸波踰祇多答へて曰く予は新たに道に入れるものなり、予は世を捨てゝより久しからず、又此教を受け僧團に入る日猶淺し、未だ審かに說く可からず、されど短き偈を以て之を記臆せり、予は之を反覆すべしとて誦して曰く、諸法因より生ずる者、彼法因に隨て滅す、因緣滅するは即ち道なり、大師の說是の如しと、聰明なる舍利弗は一言の下に佛陀說法の要領を解得して、忽ち心中の垢を離れ、法眼淨を得、實の如く觀得した、淨不の垢染あるなく、墨胝を遠離し、染色を受け安きが如くであつた、舍利弗は喜んで曰く汝が得たるが如き能く苦を滅すの法は數刧那由陀、未だ曾て獲ざりし所なりと乃ち直に大目犍連の所に往く、彼先ちて問ふて曰く、汝の威儀は明らかなり、汝の顏容は清らかなり、汝は死より解脱せしや、舍利弗答て曰く然り吾友よ、予は死より解脱せりと審かに事の次第を話した、目犍連聞きて亦忽ち解脱し、喜びて曰く、汝甘露に遇ふが故に、面目淨くして光澤あり、汝讚して是法を說く、聞き終りて淨眼を得たりと兩人大に滿足して林中に於ける刪闍耶多數の弟子に、熱心に此法を說き、之を帥ゐて佛陀の所に往きた佛陀兩人の來るを知り、周圍のものに兩人か佛弟子中の最高

第一に位すべきを說かれた、兩人直接に佛陀の感化を蒙り直ちに阿羅漢を得、常に佛陀の左右に待して一生を終始した、此二尊者は佛門に於ける一對の俊英にして舍利弗は知慧を以て目犍連は神通を以て獨特の天稟を有して居てた、而して予は特に其宗敎的友誼の淸らかにして濃かなるを想像して、欽慕に堪へないものがある。

新刊紹介

◉根來の曙

小石川大塚坂下町　加持世界社

眞言新義派の開祖、根來の覺鑁上人の一代を新体詩にものし、付するに各節の下に小傳を以てせり、歌は佛門の歌人土岐善麿師にして、傳は眞言宗の文士小林正盛師の手に成り上人の德を頌するに遺憾なきものゝ如し、施本用として適當のものなり。（定價五錢）

長眉山人著

◉釋雲照

小石川大門町　文藝社

近時雲照師に對する批難の聲は屢々文壇上に見る所なり、兎に角師は性癖多き佛界の一人物たるを失はず、本書は師の經歷を叙し論評公正、師の性格を示すに力めて略ほ其目的を達せり、著者は目白僧園の事情に精通する人なりと云ふ、本書の內容以て可知也。（定價二十錢）

青柳有美著

◉善麿哲學

本郷四丁目　文明堂

翼の有美氏の著者今亦本書を公にせり、例によりて言奇矯、筆亦犀利、よく人の言はんと欲する所を言ひあらはし以て短所を指摘するに巧なり、たゝ憾らくは常軌を逸して好んで意想外に驚せんとする著者の性癖甚なり。掬摸公評論の如き其一例なりとす。（定價廿五錢）

花田凌雲著

◉佛敎倫理の實踐

本郷四丁目　文明堂

世、普通の倫理書に乏しからず、倫理の要は實踐躬行にあり、其所說高遠にして深奧に達するも、たゝ之を空理空論に終らしめんか、些の裨益する所なし本書は學說上より之を論せば或は一讀の價値なからんも、佛敎々理を基礎として道を行ひ德を進むるに就て極めて平易に實踐の方法を說きたるもの、其說敢て嶄新ならずと雖、本書の特色實に此點にありて存す。（定價貳拾九錢）

加藤玄夢著

◉哲學概論綱要

東洋社發行

本書は文學士加藤玄智君の新著、定價金七十五錢なり、著者は哲學書の著述に堪能なる學者にして、從來の著書は孰れも散漫にして要領を得ざりしが、本書は哲學概論及哲學研究の必要を唱へ、第二篇は、第一章哲學と科學、第二章認識論、第三章實在論に分ちて、諸種の思想を分析綜合し、秩序甚整頓せり、唯著者が餘りに文章を飾らんと欲したるためにや、實在論の第二節などに「花に啼く鶯、水に棲む蛙を弄し、滿壁の蝸牛能く字を寫す、雪舟の畫、探幽の筆、哀婉の調、雅亮の曲、豈に梁上に塵跳ね、鬼神地下に哭せざらんや、是を以て之を見れば、美現象は又是れ宇宙萬有の眞相ならずんばあらず」などいふ名文あり、「是を以て之を見れば豈に夫れ然らんや」などはかゝる哲學概論には中學生の文章めきてちと可笑しからずや、著者は最後にヴントの言を引き、宗敎心を滿足し、哲學的根據の確乎たるものを得來りて遺憾なからしむるは獨り圓融實在論あるのみと論斷せり以て本著に於ける氏の立脚地を見るに足るべし、氏の萬有在神論を說くに獨りクラウゼのみを擧げて他の學者に及ばざるなど、時として稍々不足の點なきに非ずと雖も、哲學界の指南針として恰好の著述たる價値あり、讀者一本を購求して座右に置くべきなり　發行所、東京神田區錦倉町三番地東洋社

加藤博士著

◉佛敎改革談

東京　金港堂

本書の內容は本誌前號に於て眞岡文學士詳細に之を論評せられたるを以て茲に其せず。（定價十二錢）